平成 28 年度 (仮称)苫小牧市民ホール建設検討委員会及び WG 合同会議
議事要旨

１　日　時　平成 29 年 3 月 22 日(水)14 時 00 分～16 時 00 分

２　場　所　本庁舎 2 階 21 会議室

３　出席者
（1）検討委員会委員 3 名
（2）ワーキンググループメンバー9 名
（3）オブザーバー(北海道大学大学院工学研究院)3 名
（4）事務局　市民ホール建設準備室 3 名

４　次　第
（1）開会
(委員長)
本日は検討委員会の皆様に加えてワーキンググループのメンバーにも参加いただいており、ここに集まっているメンバーの皆様で来年度も含めて基本計画について議論していくことになる。本日の内容としては今年度の締めくくりになるが、来年度の基本計画の検討に向けて、どのように今年度の流れをつないでいくか事前スタディをしたいと思っている。それについては、本日の後半で行う次第 3 以降の話になってくるので、まずは次第に沿って進めたい。

（2)議会の報告について
(事務局)
2 月 24 日から 3 月 17 日にかけて第 9 回定例会として市議会が開催された。、内容としては市長の市政方針、代表質問、予算審査特別委員会、常任委員会、安全・安心及び市民ホール建設に関する特別委員会となっている。
市政方針については、「市民ホールについては、現在の苫小牧東小学校敷地を建設地にすることを基本に施設の機能や規模、運営方式などについて基本計画の中で検討を進めていく。」という内容であった。
代表質問では「市政方針の内容で建設地は決定なのか」、「今後のスケジュールはどのようになるのか」、「複合化の検討で重視するポイントは何か」という質問があった。
「建設地は決定なのか」という質問に対しては、「現市民会館敷地、現東小学校敷地、旧 egao 跡地、総合体育館南側敷地の 4 つの敷地を比較した結果、現東

小学校の敷地が最も適していると判断した。これはあくまでも市の考え方であり、今後、議会や検討委員会、市民の皆様から御意見をいただいて最終的には基本計画の中で決めていきたい。」と答弁した。

「今後のスケジュール」については、「平成 29 年度に基本計画、その後平成 30～32 年度に基本設計・実施設計、平成 33～35 年度に建設工事、平成 36 年度には供用開始したいと考えている」と答弁した。

「複合化の検討で重視するポイントは何か」という質問については、「基本構想で『親近感と愛着の持てる憩いのプラザ～苫小牧市民のサードプレイス～』の実現が最も重要であり、今後もそのためにどのような機能をどのくらいの規模としていくか、検討委員会やワーキンググループなどで検討を進めたい」と答弁した。

科学センターについては、教育委員会が所管している施設となっており、基本構想の中でも複合化の対象施設としていたが、教育委員会の結論としては「市民ホールとは複合化を図らず、単独で建替えなどの方向性を検討していく」という答弁があった。

安全・安心及び市民ホール建設に関する特別委員会では、建設地に関する市の考え方を改めて説明した。前回示した４つの敷地について、選定における前提条件や評価項目の内容を説明し、各敷地の評価結果から東小学校敷地が最も適しているという市の考え方に至ったことを示した。

その後「複合対象施設について」「基本構想のテーマを実現するための仕掛けづくりについて」「管理運営手法について」「施設の評価の在り方について」などの質問があった。

複合対象施設については市民会館、文化会館、労働福祉センター、交通安全センターの４つの施設を基本に考えていると答弁した。

仕掛けづくりについては、現在ワーキンググループで 63 個ものアイデアが出ていることとその一例を紹介した。

管理運営手法については、ソフト事業の企画力や展開力が重要になってくるため、今後もそれらを視野に入れながら検討していくと答弁した。

施設の評価の在り方については足を運んでいただいた市民の方々にどのくらい満足してもらえるかが大切になってくるため、館の職員だけでなく誰が対応しても高い満足度を得られるような施設づくりを目指していくと答弁した。

（３)今年度の成果確認

(北海道大学大学院工学研究院)

資料２「事業体系図(案)」、事業アイデア集について説明。

（4）事業アイデアに関連させた空間の考察

(委員長)

本日のメインであるが、どのような場所でどのようなことをしたいのか、3つのグループに分かれて議論していただきたいと思っている。

本日実施する内容を少しお話する前に、63個の事業アイデアがなぜ基本計画において大切なのかもう一度復習として触れたい。検討委員会やワーキンググループでもホワイエの話をしたと思う。ホールを計画するときにホワイエをつくるのだが、設計者にとってこのホワイエが何のためにどのように使われるのかという情報がなければ、設計者は一時的な避難空間として有効な面積を計算してそれで終わってしまう。そうではなくて、これから設計するときにホールで上演がないときでもホワイエで日常的に一般市民が来訪できるような場所にするアイデア、イベントをするような場所にするアイデア、ちょっとした運動をするようなアイデアなど具体的な活動を提示することによって、「窓ガラスが大きい空間がいいかもしれない。」、「屋外空間と連続するような設計がいいかもしれない。」といった考え方を基に設計者が設計を進めることができる。発注者側が設計者に対してどれだけ具体的な情報を伝えていけるかが、基本計画の役割になるので、設計者はアイデア集を読み込んで「苫小牧市はどういったことをしようとしているか。」を考えながら計画を立てていく。これが稚拙な基本計画なのか、よく練られた基本計画なのかによって今後の設計が随分変わってくる。

そこで、本日は来年度に向けた事前スタディをセッティングした。例えば事業体系図の中にある活動スペースの「おもてなしフェスタ」を考えていったときに、200㎡の諸室が必要となったとする。鑑賞スペースの事業Aで200㎡、事業Bでも200㎡、展示スペースの事業Cでも200㎡の諸室が欲しいとなった時に1対1で全て考えていくと、とてつもなく大きな建物になってしまう。1つの施設として合理化・複合化していくときに、できるだけ同じ規模の諸室は共用して使っていくことになるのだが、ここからが先ほどの具体的な議論が重要になってくる。例えば、最初の事業Aは会議、打合せがメインとなるとすると外に開いている必要はない。しかし、事業Cで料理教室を行おうとするとふらっと立ち寄った人が見て楽しめるような空間にする必要がある。それぞれの諸室を200㎡としたときにその諸室は開口が必要なのか、開閉できる設備が整っているかを考える必要があり、これらのことが何も考えずに進めてしまうと、その諸室は単なる会議室として200㎡の諸室になってしまう。それぞれの活動がどのような空間をイメージしていくかを具体的にすることによって、この200㎡の諸室は防音機能については必要ないが、開口部を開閉でき外とのつながりが持てるような空間、床はできるだけ平面の方が柔軟に使えるといったような

性能を入れていくための根拠になってくる。このようなことを今後の設計では考えていかなければいけない。

ただ、本日は皆様にこの設計をやってもらうわけではなく、ある 1 つの活動を例題に挙げたときに、どのような場所だと活動がしやすいか、どのような設備があれば良いか、どこの空間とつながっていくと相乗効果が高まるだろうかを場所のイメージを膨らませて多くのアイデアを出していってほしい。来年度、これらのアイデアを多く積み上げていくことによって、基本計画で 200 ㎡の諸室が 2 つでいいのか、3 つでいいのか。また、諸室を 3 つにした時に、1 つは会議室で残りの諸室はどのような性能にするべきかを検討していく際の手がかりになる。

～事例紹介の説明後、３つのグループに分かれてワークショップ～

■　活動グループ

空間を検討した事業アイデア：

「おもてなしフェスタ」

共用空間の連続性について

・「おもてなしフェスタ」は、各地のコミュニティセンターや自宅などで行われている小規模な活動が共用空間に一堂に会するというアイデアだが、どのような共用空間を連想するか。

→屋外も屋内も両方使えるような場所を考える必要がある。

→屋内ホール、ロビー、屋外オープンスペースが連続している茅野市民館のようなイメージが考えられる。

→ロビーと屋外の間の庇のある場所は使いやすそうだが、一直線に繋がっていると、窮屈な印象がある。

→気軽に行き来できるという場面を想像すると、例えば料理のイベントなどをする際、まずはどこにどのような料理があるのか、見渡せるほうが入りやすい気がする。

→屋外のオープンスペースにどこからでも入ることができ、その周りにＬ字型のような建物があるイメージができそうだ。

→屋外と屋内がつながると、行き来できる面が多くなるので、使い勝手が良くなる気がする。

→屋外と屋内の接続面を開けば見通しがよく、閉じればプライバシーも保てる。

屋内共用空間の使い勝手について

→建物の奥行きによって、スタジオなどの場所と連続するのか、あるいは廊下のような場所になるのか、大きく印象が異なる。

→例えば料理で火を使う場所や、あるいは演奏などで閉じなければいけない場所をつくる場合、角も使える方が良いと思う。

・ 例えば、共用空間で演奏をするという場合、どのような場所だとやりやすいか。

→Ｌ字型の建物の場合、角にステージを配置し、屋外、屋内の共用空間が演奏者側から見渡せる場所がやりやすいと思う。

→角にステージがあり扇型状に観客が座る、中央にステージがあり、観客が取り囲むなど、演奏の種類により配置が変えられると使いやすいのではないかと考えられる。

→最近では少々値段はするものの、反響板などを設置することで、どのような場所でもステージは設営できるようになっている。屋内外を使う設営も考えやすい。

→例えば大ホールと小ホールの間の不均一な場所も、演奏会や映画の上映など、壁を使うイベントが開催できるといった特徴がある。いわき芸術文化交流館アリオスでは、カスケードと呼ばれる場所を使っている。

庇の有効性について

→料理イベントの場合、例えばテントを張った屋台形式のものが多くみられるが、表と裏ができてしまう。せっかく屋内外を使うのであれば、あまり裏が出ないように、庇の部分などを有効活用できれば良いのではないかと思う。

→庇部分はなるべくたっぷりと面積をとりたい。可児市の例のように、デッキがあり、椅子が置いてあるだけでも居心地が良い気がする。

→雪の問題があるため、どこまで長い庇をつくることができるかが疑問である。

→温暖な地域とは異なるので、荷重を想定しなければいけないが、近年の北海道の学校建築などでは庇が積極的に用いられている例もある。

→このイベントのために庇を大きくつくるという論理は通りにくく、新しい施設に庇があることの意味を注意深く考えなければいけない。

→夏が短く雨の多い苫小牧の気候を考えると、庇が大きい場合、楽しみにしている夏の活動が確実に行えるというメリットがある。全て屋内で完結するのではなく、屋外も最大限に利用するという意識が生まれるのではないかと思う。

■　鑑賞グループ
空間を検討した事業アイデア：
「シアター de アフターパーティー」

ホールやホワイエ、ロビーの連続性について

→検討委員会でも森委員長が、「ホワイエの発祥はホールでのコンサート等の鑑賞後にパーティーを開く社交場であった。」という話をされたが、「シアター de アフターパーティー」を実際に行う場合、ホールの周りにどのような空間があれば良いのか考える必要がある。

→ホールやホワイエ、ロビーが連続していて、広いロビーでアフターパーティーを行えると良いと思う。

→ロビーは1階入り口の近くにあり、南面するのが良い。

→アフターパーティーの飲食物を用意できるレストラン、カフェが近くにあると良い。それも入り口の近くで、かつロビーの近くに配置されると良いと思う。

→ロビーと芝生、樹木のある屋外広場は連続していて、1階は誰もが自由に出入りできるような場所とする。

→ロビーと屋外広場の間には、デッキスペースがあり、その上には庇が張り出しており、雨の日でもデッキスペースが使えるようになっていると良い。

→デッキスペースにはLEDライトが設置され、夜になるとロビーをライトアップし、プロジェクション・マッピングができると良い。

ロビーの設備などについて

→ロビーにプラグを挿すことができる場所など、色々な設備がどこでも使用できると良い。

→ロビーにあらかじめ設備が用意されていると、アフターの演奏もできるだろう。

→アフターパーティーの飲み物や食べ物が床に落ちることもあるので、床はすぐ掃除できる素材を用いる。

ホール周りについて

→ホールが平土間ではなく、2層以上あるとして、1階と2階の中間階にガラス張りのスペースを設け、映写ができると良い。そうすると、子どもたちにアニメも見せることができる。

→大ホールに、小ホールが隣接していると良いと思う。

→2 つのホールの裏側、バックヤードには楽屋がいくつか並び、ピアノなどの共有機材が用意され、リハーサルも開催できるようにしておく。
→大きめのホールからスタートし、その南側にホワイエ、ロビー、庇のあるデッキスペース、屋外広場が連続し、入り口付近にレストラン・カフェ、大きめのホールの隣に小さめのホール、ホールの裏側のバックヤードに数室の楽屋、といったゾーニングがイメージできそうだ。

■　展示窓ログループ

空間を検討した事業アイデア：

「わたしの絵日記プロジェクト」「図書室(ライブラリー)de ライブ」

<u>場所の関連性について</u>

→「わたしの絵日記プロジェクト」は、利用者が施設で植物を育てていき、それらの観察結果や育成過程を展示するアイデアであるため、展示空間も外部空間と近い方が良いと思う。

→「図書室(ライブラリー)de ライブ」は、本格的な図書スペースである必要はなく、ちょっとした場所に本の紹介ブースのようなものがあればよく、さらに飲食も許可するなど、図書館よりも気軽な場所になった方が良いと思う。

→「わたしの絵日記プロジェクト」では、当初コキア（別名・ホウキ草）を用いて、観察だけではなく、ほうき作りや実を食べるといったものづくり・食にまで発展させていくアイデアを提案していた。ギャラリーだけではなく工房スペースもあり、それらのスペースからコキアが植わっているスペースが見えているような配置が良いと思う。

→2 つのアイデアを実現する理想の空間として、カフェが近くにあっても良いように思う。また、外部空間に関するアイデアとして、事業アイデアにはなっていないが、これまでの検討の中でドッグランや猫カフェといった話も出ていた。

→「図書室(ライブラリー)de ライブ」の企画の中の一つとして、例えばペットを対象にした本を紹介するなどのバリエーションも考えられるだろう。そういった企画をする際には、展示スペースから外部にあるドッグランが見えており、さらに庇などで外部空間と内部空間が緩やかに区切られているような場所が適しているのではないかと思う。

→カフェがギャラリー、図書スペースの隣にあり、さらに外部空間に開かれた開放的なスペースであるとすると、カフェは利用者が行き交うような賑やかなイメージが想像される。事業アイデアの中には、働き世代をターゲットとしたカフェというアイデアもあるので、賑やかなものとは異なる静かなカフェがあっても良いと思う。

→子どもの居場所と大人がくつろぐ静かな場所は、それぞれ区切られていたり離れた場所にあったりと、別々の場所にあった方が良いと思う。

→これまでの議論から性質の異なるカフェの配置を考えるならば、植物が植えられている場所に、森の中にいるような体験ができるカフェを設けるアイデアが考えられる。

本棚や椅子などの家具について

→「図書室(ライブラリー)de ライブ」は本に関するアイデアだが、どのような本棚が良いか考える必要がある。

→壁一面が本棚になっており、天井まで棚が続いているようなものがあると雰囲気が出て良いと思う。

→前回紹介した千歳市のまちライブラリーでは、背板がなく本棚の向こう側が透けて見えるようなものになっており、視界の抜ける開放的な場所になっていた。

→ココトマにある本棚は移動ができるものである。固定式のものでなく、移動ができてその都度本を紹介するスペースをつくっていくような方法も考えられると思う。

→本を読むスペースのバリエーションも考えられる。例えば、階段上のスペースで自由に座り、本を読むことができるような場所もある。

→本棚の事例として、恵庭市にある「かしわのもり」という生涯学習施設では、壁一面が本棚になっており、さらにそこに窓が開けられている。また、腰掛けられるベンチや本をしまっておく本棚と本を読むスペースがセットで考えられた場所になっている。

・ギャラリーや図書スペース、カフェといった場所は、机や椅子も空間を仕立てる重要な要素になってくる。2 つのアイデアに見合う机や椅子のイメージにはどのようなものがあるか。

→千歳市のまちライブラリーには、上から吊るされゆらゆら揺れるような椅子があった。そういったゆっくりとくつろぐことのできる椅子が良いのではないかと思う。

→世代によって机や椅子が使い分けられる方が良い。特に、子どもの場所と大人の場所では、家具も専用のものが用意されていた方が良いと思う。

(委員長)

イメージを膨らませて夢を描いていくことは重要なことだと思う。住宅を建てるときに置き換えると、家族で「〇〇といった家にしよう。」とイメージが豊かになると思う。それをどのように実現するかは設計者が考えていくことだが、設計者からするとそのイメージが多くあると手が動きやすい。ただ、予算内で収まらないこともあるので、「〇〇の部分は我慢しよう。」ということにもなるが、最初に「〇〇をしたい。」といったことを出すのは大切である。この議論をもっと詰めていくために、本日は事前スタディをしていただいた。議論の中で委員の皆様は関係性を非常に重視しているように感じた。オープンスペースやＬ字型の配置などもそうだが、ゾーンやエリアを考えていくうえで周りとどのような関係性になるのかをしっかり議論していただいた。これはおそらくこの 1 年間の議論の成果である。委員の皆

様が事業アイデアの議論をしてこなかったら、おそらくもっとピンポイントの性能の話になっていたと思うが、周りとの関係性を意識していただいた議論ができていた。それはアイデアとして出してきた活動のイメージが頭で描けているからであり、これを基に来年度の 1 年間でもう少し建築的な話につなげていきたい。

（5）来年度のスケジュールについて

(委員長)

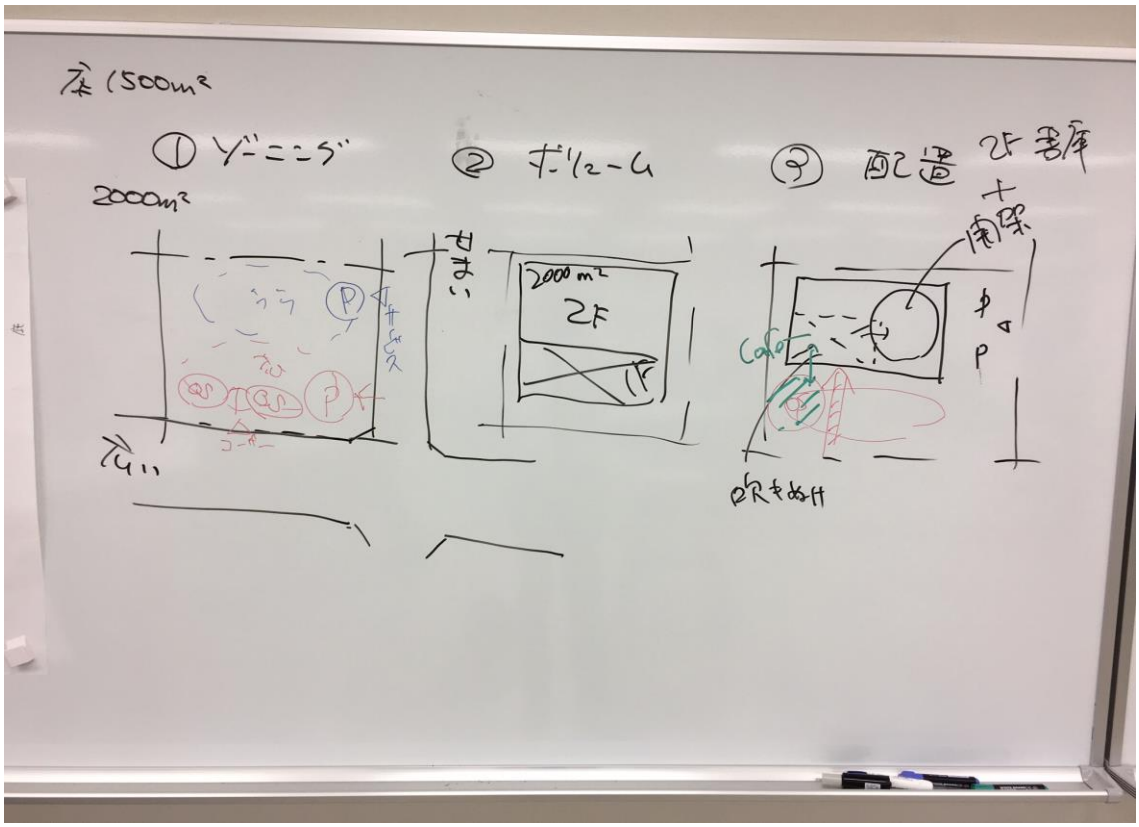
本日考えていただいた内容は、活動をイメージしてその場所から全体に膨らんでいくようなイメージだったと思う。これは非常に重要なことだが、一方で全ての活動をただ集めて全体の建物としてうまく機能するかというとそうではない。先ほどの事前スタディの中でも、庇が話題として出てきたが、それが 1 つの用途でしか使えないようであれば、施設として何億円かけて庇を作ったとしても意味がない。

そこで、来年度は全体を考えていくときに、どのような段階があるのか一般的な話をさせていただきたい。建築の分野でいくと、ゾーニング、ボリューム、配置という 3 つの段階がある。来年度は大きくこの 3 段階を軸にワークショップ形式で、絵や模型を前にしてスタディを重ねていきたい。

まずゾーニングについては、例えば図書館を設計するとして、ある敷地が上図①のように道路に面しているとする。それぞれ広い道路と狭い道路に面しており、仮に 2,000 ㎡の敷地面積だとする。多くの地域図書館は床面積が 1,500 ㎡くらいになっており、2,000 ㎡の土地に床面積が 1,500 ㎡ほどの図書館を建設しようと考えたときに、まず初めに何を考えるかというと、この土地をどのように使おうかを考えていくわけである。まず図書館は、図書を借りる人と貸し出す人に区別できる。これはユーザーとサービスという言い方をするが、建築計画の原則からすると、このユーザーとサービスをしっかり区別することが原則になっている。ユーザーである多くの利用者の方は、アクセスを考えると広い道路から入ってくる方が利便性が良い。ユーザーとサービスの動線を分けることの 1 番の目的は安全性である。例えば、サービス側は大量の本を出し入れし、機材を運ぶので、動線をユーザー側とは反対にする。なおかつ、サービス側は大きなトラックが往来することがあるので、原則広い道路にサービス側の動線をもってくるようなことはしない。また、広い道路にトラックが停まると渋滞が起きてしまうので、一旦敷地に入ったところにサービス側の駐車場を持ってくる。そうすると、自ずと広い道路が表となり、狭い道路が裏となり、サービス用の駐車場とユーザー用の駐車場の位置が決まる。ユーザーの駐車場もただ単に広域の道路から入ってしまうと歩行者の動線とぶつかり渋滞が起きやすくなる可能性があるので、その 2 つの動線を分けて歩車分離にする。ここまで出てくると、駐車場の場所や表や裏が明らかになり、「表にはちょっとしたオープンスペースがあるといいかもしれない。」といった考えも出てくる。こういったかたちで土地利用を考えていくのがゾーニングになる。

ボリュームとは何かというと、2,000 ㎡の土地に 1,500 ㎡の図書館を平屋で建てると、駐車場やオープンスペースがなくなってしまう。「2,000 ㎡の土地に 1,500 ㎡の図書館を建設しようとすると、駐車場やオープンスペースなどを考慮しておそらく 2 階建ての図書館になるだろう。」と考えていくのがボリュームである。

配置については、ゾーニングとボリュームを併せて考えていくことになる。例えば、2 階建ての図書館を考えたときに、「図書館以外に駐車場のスペースも必要になるので、ボリュームとしては平屋では難しい。また、ゾーニングとしてはオープンスペースを表に持ってきたとしたら、おそらく建物は上図③でいうと左の方になるだろう。なおかつ、サービス側の動線も必要になるので、それを配慮したサービス側の駐車場のつくり方をする必要がある。」といったことや「例えば、総 2 階建てだと圧迫感があるので、吹抜けを設けて、そこに歩行者が歩道でアプローチしてくるようなつくりはどうだろうか。吹抜けの前にオープンスペースを設けて、そこに面したところにカフェがあってもいいかもしれない。また、2 階建てでいうと、オープンスペースに近いところに図書の開架スペースをつくり、2 階部分は書庫になってもいいかもしれない。」と考えていくのが配置になる。



来年度はこのような基本的な建物のつくり方を 3 段階としてステップ 1、ステップ 2、ステップ 3 のようなかたちで考えていくことになる。

ちなみに複合対象施設の敷地面積を合算すると、およそ 18,000 ㎡となる。例として図書館の話題を挙げたが、今回の市民ホールが図書館以上に難しいのは、ホー

ルでいくと舞台、フライタワー、奈落などがあって立体的にボリュームが出てくるところである。それをどのように立体パズルのように組み立てていくのかについても、今後の検討委員会などの中でスタディしていきたい。ゾーニングや配置を考えるうえで、活動アイデアのイメージがないと根拠がない。どこにオープンスペースを持ってきて、さらにはオープンスペースの近くにカフェが必要なのかどうかというのは、今まで出してきたアイデアからイメージされるスポットの場所のシーンがないと関係性は作られてこないので、このあたりを並行して議論していく。

皆様に議論していただいたことが、来年度に建物のかたちを検討していく際の基礎となる。基本計画から先は設計者が考えるので、委員の皆様は発注者側である市のサポーターとしてゾーニング、ボリューム、配置までを基本計画で考えていく。スポットとしての場所もプラグが挿せるなどのアイデアも含めて基本計画で盛り込んでいけるようにするのが今後の取組になってくる。

(6)閉会